
忘れられない約束

桜光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忘れられない約束

【Nコード】

N4976S

【作者名】

桜光

【あらすじ】

春に転校してきた、少し引つ込み思案な面のある千佳。明るい性格で誰からも好かれる人柄だけれども、心臓に大きな病を抱えている怜。決して結ばれることのない二人が紡ぐ、甘く切ない恋物語。

1 出会い

今日は転校初日。私は中学三年生の春に、この学校に転校してきた。

お父さんのお仕事の都合で、転校。転校なんて今まで縁が無かったから、話を聞かされた時は驚いた。十四年間過ごした場所を離れるのは辛かったけど、ここでまた新しい生活を送るのは、楽しみでもある。

どうせだったら昨日の始業式にも参加したかったけど、引っ越しの都合で一日遅れる形になってしまった。今日は新年度二日目。この学校での新生活がこの日から始まる。

今、私は教室の前で待機中。教室では朝の会が始まっている。先生が転校してきた私の説明を皆にしてくれているのだと思う。呼ばれるまでここで待機してるように言われた。

新年度二日目でまさかの転校生。皆、どう思ってるかな。これから私、このクラスの友達と仲良くできるかな。着慣れていない制服、リボンとか曲がってないかな。初めて転校生という立場になって、ずっと緊張が治まらない。

そんなことを考えていると、教室の扉が開かれた。

「じゃあ長谷部さん、入って」

先生に案内され、私は教室の中へ入る。

教室を見回して皆の顔を見ると、心臓の鼓動の速さが更に加速したように感じられた。

まずは、自己紹介。最初の一步は、失敗できない。

「東京から来ました。長谷部千佳です。これからよろしく願います」

無難な挨拶だったけど、囁むこともなく言えた。クラス中から拍手が沸き起こった。その瞬間、皆が私を認めてくれたように感じられた。

「じゃあ長谷部さん、あなたの席は用意してあるから。あそこの席に座って」

先生に指示された場所に向かう。私の席は、一番後ろだった。

この位置からでも黒板は見える。授業に支障は無さそうだった。

「長谷部さんの周りの人は、困ったことがあつたら助けてあげてね」
先生がそう言ってくれた。若いけれど、生徒を気遣うことのできる優しい先生なんだろうな、って気がした。

朝の会が終わって、一時間目の授業が始まるまでの休み時間を過ごすことになった。

転校生だから、皆が私のところに集まるのかなと思いきや、そんなことはなかった。新しい学年になって二日目、皆が私のことを相手にするほど余裕がある訳じゃないのかもしれない。でも、助かった。質問攻めとかされても、ちゃんと応じる自信が無い。

私は人付き合いが得意な方ではないから、囲まれるような状況は遠慮したい。

「ねえねえ、長谷部千佳ちゃん、だったよね？」

突然、隣の女の子が話しかけてくれた。凄く可愛い子だった。長い髪、吸い込まれそうな大きな瞳。街を歩けば周りの皆の注目を集めてしまいそうな、そんな美少女。彼女は私に笑顔を向けていた。
「私、長瀬怜。クラス替えて、仲良い友達とか皆離れちゃって。まだこのクラスで友達もいないんだあ。これからよろしくね」

とても愛想の良い子だと思った。長瀬怜^{ながせれい}。気軽に話しかけてくれて、誰とでも分け隔てなく接してくれそうな人柄。すぐに友達もいっぱい作って、クラスを中心になりそうな可愛い女の子。

こんな子が私の隣の席にいてくれて、良かったと思った。すぐにも友達になれそうで、一気に緊張がとけた。

「うん、こちらこそよろしくね。えっと……長瀬さん」

「怜でいいよ。だから私も、千佳ちゃん、って呼んで良いかな？」

「う、うん。大丈夫。じゃあ……よろしくね、怜ちゃん」

そして二人で微笑み合う。早速クラスに、名前で呼び合う仲の友達ができる、凄く嬉しかった。

これが、私と怜の出会い。一生忘れることのできない、出会った。

2 帰宅部

休み時間が来る度、怜ちゃんは私に多くの質問をしてくれた。

前の学校のこととか、どんな場所に住んでいたのかとか、いろんな質問。私の話がどんな内容でも、楽しそうに聞いてくれる。人と会話することが苦手な私でも、気軽に話すことができた。

「じゃあさ、部活は何してたの？」

次の質問は、部活についてだった。これで何個目の質問だろう。でも、悪い気はしない。

「私、文芸部だったんだあ。本とか読むの、好きだから」

「文芸部かあ。なんか千佳ちゃんのイメージにぴったりだなあ。こつちでも文芸部入るの？」

「うーんと、もう三年生で受験もあるから、学校から入らなくても良いって言われた」

三年生だと、もう長く部活をやってる暇もない。この時期に転校して部活に入っても、部の人たちにも迷惑がかかってしまうかもしれない。学校側はそれを考慮してくれてか、特別に私の未所属が認められることになった。本当に特別な措置なんだと思う。

「ねえねえ、怜ちゃんは何部なの？」

私はこの場で初めて怜ちゃんに質問をした。

「私？ 私は入ってないよ」

「……え？」

怜ちゃんの意外な返事に唖然としてしまう。この学校は、部活動に所属することが義務付けられていると聞いていたからだ。

「あ、えつとね。私、ちよつと病気持ちだからさ。入院することとかもあつて、部活とかやる余裕ないんだよね。だから特別に認められてるの」

更に意外な言葉だった。こんなに元気そうなのに、病気だったり入院することがあつたり、信じられなかった。偏見かもしれないけ

ど、私が持つ病弱な人のイメージとはかけ離れていたから。

怜ちゃんの病気については気になることもあるけれど、今は聞かなくても良いと思った。それよりも、一つ共通点を発見できた喜びが大きかった。

「じゃあ、私と怜ちゃんは、帰宅部ってことかなあ」

「え？ 帰宅部？」

「うん。特別に部活に入らないことが認められてる同士。部活に入っていないから帰宅部だよ」

私がそう言ってから数秒後、言葉の意味を理解した怜ちゃんは今までで一番の笑顔を見せた。

「うん！ そうだね。二人だけの帰宅部だよ。帰宅部へようこそ、千佳ちゃん」

「ふふ、これからよろしくお願いします。部長さん」

「……私、部長なの？」

本当に会ったばかりとは思えないほど、私たちは仲良くなってしまう。今まで謙虚で人と話すことの多くなかった私でも、つい話したくなってしまう。怜ちゃんは、そんな魅力がある子だった。どんなにくだらない些細な話でも、二人で話すと盛り上がることができる。一緒に笑い合うことができる。

私にとって、初めての『親友』と呼べる存在になるかもしれないと、この時から感じていた。

今日は午前中で学校は終わりとなった。授業も学級活動が中心で、勉強せずに終わった。

クラスの皆は部活があるだろうから、教室でお弁当を食べたりしてる人もいるし、もう既に部室へ向かった人もいるみたい。

そんな中で、私と怜ちゃんは二人で帰ることになった。

「一緒に帰ってくれる友達がいるなんて幸せだよ……今までずっと帰るときは一人ぼっちだったからさ、うう」

そう言って大袈裟に泣いたふりをする怜ちゃん。表情が豊かな子だ。

「あ、そうだよ。皆、部活やってるもんね」

「うんうん。だから今日が帰宅部最初の活動って感じ」

これから毎日下校しよう、という約束もできた。今まで一人で帰っていた怜ちゃんも、私がいることで気が楽になるかもしれない。

帰り道は途中まで同じで、話す時間がたっぷりであった。その途中、怜ちゃんがこんな話題を出してくれた。

「そうそう、来月は修学旅行だよ」

「え、修学旅行……？ あ、そっかあ、この時期なんだ」

前の学校では修学旅行は秋だったから、まだ話が出ることはなかった。でも、転校してきたことで修学旅行は間近に迫ることになってしまった。

「うん。東京だよ！ 私、今から凄く楽しみ」

行き先を聞いて軽くショックを受ける。東京は、つい最近まで住んでいた場所だったから。

「……あ、でも千佳ちゃんは東京に住んでたんだっけ」

「うん、でも大丈夫だよ。修学旅行で行く東京も新鮮だと思っからどうせだったらもつと違う場所に行きたい気持ちもあったけど、諦めよう。」

「そう？ なら良いんだけど……今度、班分けとかあるみたいだからさ、私たち、同じ班になれると良いね」

「うん！ 怜ちゃんと一緒の班だったら、きっと楽しめるよ」

見慣れた光景でも、また違った見方ができるかもしれない。だから、今は修学旅行を楽しみにしよう。

「じゃあ、私はこっちだから。また明日ね」

途中の十字路で、怜ちゃんとは別れることになった。

「うん、今日はありがとね、怜ちゃん」

「私、お礼言われるようなこと何にもしてないよ？ むしろ私が千佳ちゃんに感謝したいくらいだよ」

「私こそ何もしてないと思うんだけど……」

「ううん、友達になってくれたし、一緒に帰ってくれた。私、凄く嬉しかったんだから」

そう言っただけで微笑む。怜ちゃんは、笑顔が似合う子だ。その笑顔を見ると、私まで自然と笑顔になってしまう。

「……そっか。じゃあ、お互い感謝だね」

「うん。ありがとう、千佳ちゃん。じゃあ、またね」

二人で手を振り合い、怜ちゃんは私に背を向けて歩きだした。

その背中を見て、私は怜ちゃんのある言葉を思い出した。

『私、ちよつと病気持ちだからさ。入院することとかもあって、部活とかやる余裕ないんだよね』

部活ができなかったり、入院したりすることもある病気。どんな病気なんだろう。

それが引つ掛かって、私はずっと怜ちゃんの背中を見ていた。

3 難しい女の子

転校してから数日。怜ちゃんのおかげもあって、私はこの学校に早くも馴染むことができた。クラスにも多くの友達ができた。

今日も朝から気分が良い。学校へ行くのが楽しみだ。

通学路では桜が満開で、春を感じさせる。朝、ここを通る度に桜を見るのが最近の楽しみだ。

都会というわけではないけれども、小さな花屋さんやケーキ屋さん、美容院、コンビニ、スーパー、病院など、多くのお店や施設が立ち並んでいる。

途中の十字路で、待つこと二分。

怜ちゃんがやってきた。

「おはよー！ 何分待った？」

「おはよ、怜ちゃん。さっき来たばかりだから、大丈夫だよ」

ここで待ち合わせをして、一緒に登校するのがお決まりになった。いろいろな話をするが、最近は修学旅行の話で盛り上がる人が多い。

「今日さ、ホテルの部屋割り決めるじゃん？ 楽しみだね」

「そうだね、一緒の部屋になれるかな？」

「自由にペア組めれば良いのにね。そしたら千佳ちゃんと一緒に過ごせるの」

私も、怜ちゃんと組めれば楽しい夜になると思う。夜更かしして、友達と語り明かすというのにも憧れる。

きっと、そういう場ではいつも話せないようなことまで話せちゃうんだろっな。

「それではこれから部屋割りを決めます」

先生の一言に、教室に緊張が走ったような気がした。私もずっと

どきどきしている。

「えっと、基本的に全員二人部屋になります。では男子と女子に分かれて、自由に部屋割りを決めてください。先生は関与しません」その瞬間、皆から緊張が抜けた。私も同じ。くじ引きとかではなく、自由に部屋割りを決めていいと言われて安心して。

皆が動き出した瞬間に、怜ちゃんに手を掴まれる。

「千佳ちゃん！ 組もう！」

もちろん、答えは決まっている。

「うん、よろしくね。怜ちゃん」

早速私たちはやることなくなくなってしまった。

基本的に部屋決めはテンポ良く進んでいたけれど、途中である問題が起こってしまった。

いつも三人でいる女の子たちが、二人組を作るのに困っている。

そして、このクラスで一人、浮いている女の子がいて、誰ともペアを組めていない状況。

他の皆は既にペアを決めていて、その四人だけがペアを組めずにいた。

浮いてる女の子は、かみじょうせい上条聖香さん。私は話をしたことがない。

人を避けているような感じで、誰も寄せつけない。言ってしまうば近づきにくい人だった。誰かと会話しているところも見ることがない。科学部に入ってるみたいだけれど、それでも一人でいるみたい。

私みたいに引っ込み思案な子ではなさそうで、ただツンツンしてる感じ。さつきから、ずっと黙っている。

顔立ちは綺麗だが、笑顔を見せたりすることはしない。そんな人だった。

三人組の子たちはグループ内で決めたかっただろうし、上条さんと一緒に部屋になるのは少し躊躇いがあるのかも知れない。

私や怜ちゃんは、ただ黙って話が進むのを待つしかなかった。

これ以上話が進まない判断してか、女の子たちの中のリーダー格の子が、一歩前に出た。

「じゃあ、私が上条さんと組むよ。二人は二人で組んで」

その女の子、新田^{にった}さんは他の二人にそう促した。二人は不満そうではあつたけれど、渋々納得したようだった。

新田さんは陸上部に入っていて、髪型はショートカット、そして男勝りな一面のある女の子。怜ちゃんとはまた違った形で人を惹きつける人だった。だからこそ、グループの子たちからも慕われていて、なかなか話が進まなかった。

新田さんは差別とかはしない人だろうから、上条さんとペアになつても自分のペースを崩さずに上手くやっていけると思う。

「よろしくね、上条さん」

新田さんは上条さんに声をかけたけれど、上条さんの反応はなかった。

周りからの上条さんへの印象も悪くなる一方で、この先が不安になつた。

「聖香はね、小学校の頃はいい子だったんだよ」

休み時間になって、誰も通らない廊下まで移動して怜ちゃんと語り合う。

私は上条さんの話を聞きたかった。せつかく知り合えたのだから、もっと仲良くしたいと思った。

「なんだかよくわかんないんだけど、中学に入ってから、夢中になつたことがあるみたい。それで他の人と関わりたがらなくなって、あんな感じ。私もさ、嫌いじゃないんだけど、あんな状態だと話もできないし。難しいよね」

言い終えてから軽く溜息を吐く怜ちゃん。怜ちゃんも、上条さんのことが気にかかつてるようだった。

上条さんを変えたのはなんだろう。私は、上条さんのことが放っておけなくなってしまうた。

「千佳ちゃん、聖香のこと、気にかけてるの？」

「え、えっと、うん。クラスの子たち、皆と仲良くなりたいたいから」

「私も同じ。聖香は無視できないんだよね。ねえねえ、今度さ、声かけたりしてみる？」

いい提案だと感じた。怜ちゃんも、私と同じように考えてくれていることが嬉しかった。一人では駄目でも、二人なら。怜ちゃんと一緒なら、上条さんと仲良くなれるかもしれない。

「うん、怜ちゃん、二人で頑張ってみようか」

「よし、じゃあやってみますか！」

こうして私と怜ちゃんは、上条さんと距離を縮めるための第一歩を踏み出した。

4 見えない気持ち

修学旅行が少しずつ近づいてきて、予定もだんだんと固まってきた。

今日は修学旅行二日目にある班別自主研修の班編成を決める日。各班で男子三人、女子三人の構成をしなければならない。

「それでは、男子は男子、女子は女子で自由にグループを作ってください。その後に男子と女子のグループを適当に組み合わせます」先生の指示が出て、一斉に動き出す皆。私と怜ちゃんも同じように動き出す。

私と怜ちゃんは、何をするか事前に打ち合わせをしていた。二人で顔を見合わせ、頷き合い、行動に出る。

目指すは上条さんの席だ。

「聖香！ 私たちと組もうよ！」

怜ちゃんが明るく上条さんに接する。しかし、上条さんは表情を全く変えず、怜ちゃんへ視線を向けたものの、無言のままだ。そんな反応をされても、怜ちゃんは折れずに話しかけ続けた。

人数が三人でなければならぬ以上、私と怜ちゃんだけではグループを作ることができない。上条さんもどこかには必ず入らなければいけないので、私たち三人にとってちょうど良い話だと思う。

口を開かない上条さんに対して、怜ちゃんはテンションを変えずに話し続ける。

「私さ、聖香と一緒にいろいろ見たいんだよ！ 聖香は行きたい場所とかある？ 私はいっぱいあるよ！ 東京なんて初めてだもん！」口を挟むことすらできないようなスピードで話し続ける怜ちゃん。そしてそれをまるで聞こえていないかのように無反応の状態を保ち続ける上条さん。

怜ちゃんも、上条さんも、最初から表情を全く変えていない。

「……分かりました、組みます。だからもうこれ以上話しかけない
てください」

数分後。周りのグループがほとんど固まってきたこともあり、ついに上条さんが折れた。素っ気ない言葉だったけれども、口を開いてもらった。

怜ちゃんが小さくガッツポーズをした。ずっと喋りっぱなしで辛かっただろうけど、目標を達成できた喜びの方が大きいんだと思う。これで、私たちはグループを組むことができた。

私たちはクラスのとある男子三人と組むことになり、その日のうちに大体の行き先を決めた。上条さんは話す気は無さそうだったし、私も東京で行きたいところなんてなかったから、ほとんど怜ちゃんや男子で予定を決めてしまった。

心配なことは多いけれど、怜ちゃんと一緒なら安心できる。私も、怜ちゃんみたいに周りから頼られる人になりたい。会ってから間もないけれど、私の中で怜ちゃんは憧れの存在だった。

「怜ちゃんは、修学旅行で何が一番楽しみなの？」

いつもの帰り道で、私は怜ちゃんに聞いてみた。怜ちゃんは心から修学旅行を楽しみにしている素振りだけれども、一番楽しみにしているものは見るだけでは分からない。

「うーん……全部楽しみだけど……やっぱり一番楽しみなのは……」
少し間が空いてから、答えが出た。

「ミュージカル……かな」

怜ちゃんが一番楽しみにしているもの。それは一日目の夜にある芸術鑑賞、ミュージカルだった。

何故か、怜ちゃんの一言から、重みを感じられた。単純にミュージカルが楽しんでいるという気持ちはあるんだろうけれど、それ以上の

思いがある。根拠はないけれど、そんな気がした。普段は見せない寂しげな表情が印象的だった。

「怜ちゃん、お芝居とか好きなの？」

「ふふふ、それは秘密ー！」

いつもの笑顔に戻った怜ちゃんは意地悪そうにそう言って、歩くスピードを速めた。

「ええ、言ってくれても……」

「いつか話してあげるよ、だから今は秘密！」

一人で先に進んでしまう怜ちゃん。慌てて私も歩くスピードを速める。

怜ちゃんの特別な思い、それが気になって仕方なかった。

そして、待ちに待った修学旅行当日がやってきた。

5 修学旅行の始まり

いよいよやってきた修学旅行初日。

新幹線で東京へ向かう。到着するまでは、周りの皆とトランプをしたり、お話したり、あつという間に時間が過ぎていった。

怜ちゃんと二人で何度か上条さんを輪に入れようとしたけれど、やっぱり会話が成り立たず、無駄に終わってしまった。

「着いたあ！」

東京駅に到着して、怜ちゃんが大はしゃぎする。早くも興奮が絶頂を迎えているようだ。

私にとって、東京駅は見慣れた場所だった。東京は一か月前まで住んでいたところだし、ここは何度も利用した経験があった。

「怜ちゃん、はしゃぎ過ぎだよ」

「そりゃ千佳ちゃんにとっては珍しくないかもしれないけどさ、私にとっては憧れの街だもん！」

周りの皆もわくわくしてるみたいだったけれど、怜ちゃんは特に目立っていた。

そんな中、上条さんと部屋が同じになっている新田さんは、周りに比べれば落ち着いていた。

「新田さんは、東京に来たことあるの？」

「え？ ううん、初めてだよ。確かに新鮮だけど、はしゃぐほどでもないかなあ」

新田さんは大人びた雰囲気を持っている人だ。まるで皆の保護者みたい。

「長谷部さんは東京から転校してきたんでしょ？ やっぱり慣れるからかな、落ち着いてるよね」

「ちよっと前まで見慣れた光景だしね……。でも、皆と一緒にだと、凄く楽しみかな、って」

「健気だね。そのくらいがちょうどいいよ。長瀬もあんた見習ってくれればいいのに」

そう言って怜ちゃんに視線を向ける新田さん。軽くため息をつく。怜ちゃんは相変わらず落ち着きがない。

今日から二泊三日。どんなことが私たちを待っているのか、とても楽しみ。

一日目は、クラス全体での研修が中心だった。班別行動は明日以降。今日は国際交流施設の訪問などで、自由な時間はほとんどなかった。

あつという間に時間は過ぎていって、もう夕方になった。

「疲れたあ……。早くホテルに行きたいよ」

前半から飛ばし過ぎていた怜ちゃんは、もうお疲れのようだった。

「怜ちゃん、これからミュージカル鑑賞だよ？ 一番楽しみにしていたことじゃなかったっけ？」

「はっ！ そうだね！ 元気出てきた！」

私の一言で、怜ちゃんは最初のテンションを取り戻したようだった。ちよつと単純だけど、そこが怜ちゃんのいいところでもあるんじゃないかな、って最近思うようになった。

私たちは会場に移動するためにバスに乗車する。今日の移動手段はバスが多かった。

バスでも怜ちゃんと隣になったので、いろいろと話を聞いてみることにした。

「怜ちゃんはさ、ミュージカルとか観に行ったことあるの？」

「うん、数は多くないけどね。今日これから観る公演の劇団は、日本でも規模が大きくてね。昔から一度行きたいって思ってたんだあ」

怜ちゃんはそう言って目を輝かせた。やはり、特別な思い入れがあるようだ。

「千佳ちゃんもさ、終わった後は人生観が変わるはずだよ？ 感動とか半端ないんだから」

言い過ぎのような気もしたけど、怜ちゃんにとってはそれほど大きなことなんだと思う。きつと、初めて観たときに怜ちゃんは人生観が変わったんだ。……根拠はないけれど。

私は東京にずっと住んでいたけれど、劇場公演などは一切観たことがなかった。どちらかというと、部屋で本を読んだりしているほうが好きだったから。

だからこそ、怜ちゃんがそこまで語ってくれると、楽しみに思う気持ちいだんだん強くなっていった。この見慣れた街で、新しい発見ができるかもしれない。そんな期待に胸をふくらませていた。

6 ふたりの夜

しばらく言葉が出てこなかった。

私は生まれて初めてミュージカルを鑑賞したけれど、ここまで感動するとは思っていなかった。

ミュージカルの世界に入り込むことができ、自然と涙がこぼれてきたし、それ以上何も言えなかった。

怜ちゃんとゆっくりり会話ができるようになったのも、ホテルに着いて寝る準備を始めた頃だった。

「修学旅行の夜なんだから簡単には寝かせないよ？」

「大丈夫だよ。私だって怜ちゃんとお話したいもん」

疲れているけれど、こうして怜ちゃんと二人つきりですつとお話してできるチャンスは無駄にたくない。この時間を楽しみにしていた。

見回りが来ても大丈夫なように部屋の電気は消して、デスクライトだけ点けた。お互いのベッドからでも顔を見合わせることもできる。

「ミュージカル、どうだった？」

怜ちゃんは私の感想が気になるようだった。

「凄かったよ。私、あんなに感動するなんて思わなかったもん」

「でしょ？ だから私は一番楽しみにしてたんだよ」

そして笑顔を見せる怜ちゃん。

怜ちゃんは始まる前、私に「人生観が変わる」と言ってくれた。本当にその通りだったかもしれない。またいつか観に行きたい、そういう気持ちでいっぱいだった。

「……突然、なんだけどさ。千佳ちゃん、私の話、聞いてくれる？」

怜ちゃんが少し真面目な表情になった。言葉も重く感じられる。

「う、うん。大丈夫だよ」

私がそう言うと、怜ちゃんは小さく深呼吸をして、語り始めた。

「いつか話そうと思ってたんだ、私の病気の話」

一瞬で空気が変わったかのように感じられた。

私に気がなっていたけど、聞き出せなかったこと。怜ちゃんの病
気。

今この場でそれを聞く事ができるなんて予想していなかった。

「私、生まれつき、心臓が弱くてさ。運動とかも全然できないし、幼い頃は入院してばかり。ずっと本を読むことぐらいしかすることがなくて」

本当に、今の怜ちゃんのイメージとはかけ離れていた。怜ちゃんに会って一か月、病気持ちを感じさせたことはない。だからこそ、簡単には信じられなかった。

「……私の病気さ、本当に重いんだ。今も学校に行けてるけど、いつまた入院するか分からないの。最後に退院してから、まだ一年も経ってないし」

いつ、また怜ちゃんが学校に来れなくなるか分からない現実。急に恐怖に襲われたかのような感覚がした。

「そんな闘病生活の中でね、ある日。六歳の頃だったんだけど、体調が安定してたから、初めて家族で出かけたんだ」

その先に出てくる言葉が、自然と予想できた。

「ミュージカルに。劇場公演に、足を運んだの」

予想通りの答えだった。

ミュージカルは、怜ちゃんにとって大きな意味を持っているのだと感じていた。この話に、直結していたんだ。

「初めて観たときは本当に感動したよ。本で読んだことのあるお話でも、新鮮だった」

怜ちゃんにとって、大きなもの。ミュージカル。

私も、今日初めてミュージカルを観て、同じ気持ちになった。自然と緊張が解けてきて、いつの間にか怜ちゃんの顔に微笑みが戻っていた。

「それから私は、あの舞台で活躍することが夢になったの。ミュージカル俳優っていろいろの？ 私もあの人たちみたいに、感動を与えたって思うようになった」

闘病生活の中で怜ちゃんが手にした一つの夢。

きつと私が簡単に考えるものなんかよりも、ずっとずっと大きなものなんだと思う。

「だから今日のミュージカルも本当に楽しみだったし、本当に楽しかった。千佳ちゃんも感動したでしょ？」

「……うん、私も。あんな感じに夢や希望を与えられるって、素敵だと思う」

私がそう言うと、何故か怜ちゃんはクスッと笑った。

「え、私おかしいこと言った？」

「そんなことないよ。ただ千佳ちゃんは本当に純粋な子だなあ、って思っただけ。そうだよ、本当に素敵だよ」

そしてまた優しい微笑みに戻った。そんなに純粹だと思われるようなことを言ったのかな、私。

「千佳ちゃんも、役者目指してみる？」

「ええ？ 私は……ちよつと……」

突然そんなことを言われて少し躊躇う。確かに興味はあるけれど、人前であんなことをするのは私にはとても無理だと思った。

「……私がやるんだったら、脚本とかかなあ」

「え、脚本……？」

「うん、実際に演じることができなくても、お話を作ることができたらいいなって」

「……なるほど。また違う形で感動を与えられるもんね」

物語を作ることとは幼い頃からやってきたこと。家族や友達に見せることはほとんどなかったけれど、いつか私の作品をいろんな人に読んでもらいたいと思う。

「じゃあ、千佳ちゃんが作った話を、私が主演女優で演じる！ そうなったら面白いと思わない？」

突然怜ちゃんがそんなことを言い出して驚いた。

「……え、え？ 確かに、面白いと思うけど……できるかな？」

「いいじゃん、夢を語ることぐらい。憧れの一つや二つ、持って損になることなんかないじゃん」

返ってきたのは怜ちゃんらしい言葉。

「……そうだね。いつか実現できるといいかも」

怜ちゃんが主役のお話だったら、どんな話を書けるだろう。きっと、自然と書き進められると思う。

小さいようで大きな夢を与えられた気がした。

「私も頑張るね、怜ちゃん」

「……………うーん、あのだ。その……………『ちゃん』付け……………そろそろやめない？」

「……………え？」

また意外な言葉が怜ちゃんの口から出た。

「私、もっと千佳ちゃんと　千佳と、仲良くなりたいから。ダメ……………かな？」

呼び捨てなんて、されたこともしたこともなかった。

考えたこともなかった。

それでも、

何故か私はとても嬉しかった。

大好きな友達が、もっと仲良くなりたいって言うてくれて。

だから断る理由なんてなかった。

「うん　　怜」

この日から、私たちの関係は少しずつ変わり始めたのかもしれない。

7 お参り

修学旅行二日目。今日は班別自主研修。朝の九時ごろから班での活動が始まった。

私たちの班のメンバーは私、怜、上条さん、そして男子三人。私はクラスの女子の人とはほとんど仲良くなったけど、男子とはまだ会話がほとんどできていない。この機会に少しでも仲良くなれたら良いな。

でも、それ以上に気がかりだったことは上条さんのこと。

上条さんはこの修学旅行でもいつもの調子で、ほとんど口を開かない。何にも興味を示していない。

班の活動が始まってから、怜は上条さんに何度も話しかけているが、返事すらもらえない。班の雰囲気は悪くなる一方だった。

ホテルから歩くこと十分、出発点である駅に到着した。

しかし、早速ここで問題が発生した。

「……ねえ千佳、電車でどこまで行けばいいんだっけ？」

「……え、分からないの？」

「……東京だったら千佳がなんでも知ってるんじゃないかなと思っ
てただけど」

目的地がどこにあるか、分からない。

この自主研修の話を進めていた怜や男子は、私が東京出身だった
こともあり、私が何でも知ってると思いついていたらしい。何も調
べてなかったみたい。

でも、私はこれから行く予定の場所には行ったことがない。場所
も文京区にあるということしか分からない。

完全に準備不足だった。

けれども、ここで誰も予想していなかった救いの手が差し伸べら
れた。

「……山手線を使うのであれば、御徒町駅まで行くのが最短ルートになります」

上条さんはそう言い残して、改札口を通過していった。私たちが困惑している間に、切符を購入していたらしい。

「ちょよ、ちょよと待つて聖香！」

怜はすぐに切符を購入し、早足で先に向かう上条さんを追って行ってしまった。この場には班の男子三人と私だけが取り残されてしまった。

えっと、とりあえず私も切符を買わないと。それよりも、上条さん、ちゃんと調べてくれたんだ。なんだかちょよと嬉しかった。

「……感じ悪いな、上条。マジ白けるわ」

「全くだな。だから友達できねえんだよ」

班の男子の井場君と木田君は小声で文句を言っている。班内での上条さんの言動に不満しか持てないみたい。助けてもらったのは、事実なんだけれども。

上条さんも、いつかきつと分かってくれる。そう信じてはいるけれども、今の私じゃ何もできない。上条さんのフォローをすることも、できない。なんだか凄くもどかしかった。

そんなことを考えていると、もう一人の男子の田代君が、

「とりあえず先を急ぎませんか？ あまり時間もありませんよ」

と言つて私たちを誘導してくれた。今は、先を急ごう。

御徒町駅で下車して、歩くこと数分。神社に到着した。

学問の神様がいることで有名な天満宮だったけれども、私は今まで来たことがなかった。

「早速参拝に行こうぜ！」

「おう！」

井場君と木田君は走って行ってしまった。男子は田代君だけ取り

残される。

「田代、あんたは行かないの？」

怜が田代君を気遣ったみたいだけれども、田代君は何も気にしてなさそうな素振りを見せた。

「はい、僕は僕のペースで行きますから」

何故か常に敬語を使う田代君。化学部で、成績が良くて、眼鏡をかけてて、周りに流されない。他の男子たちとはちよつと違ったイメージがある。

話すときはいつも敬語で、周りに流されないっていう点は、上条さんにちよつと似ているかもしれない。

田代君は自分のペースで、一人先に進んでいった。

私、怜、そして上条さんの三人で並びながら歩く。上条さんが勝手に行つてしまわないように怜が適当な話をふつたり、歩く速度を合わせたりしている。でも、上条さんはほとんど無口で、適当な返事ばかり。私は怜ともあまり話せてなくてちよつと寂しい。

途中、参拝を済ませた井場君と木田君とすれ違った。

「俺たち、お土産見てるから！」

「お前らも早く来いよ！」

とだけ言い残してすぐに去ってしまった。この二人もある意味周りに流されない面を持っている。

参拝する場所に辿り着いた。ちょうど田代君がお参りを済ませたところだった。

「ここは、学問の神様で有名ですからね。神様をお願いするのも悪くないですよ」

田代君は当たり前のことを言い残し、来た道に戻っていった。

「よし！ 私たちもお参りしよう、千佳、聖香！」

「うん、そうだね」

上条さんの顔を覗いてみる。……ここまで来ても本当に無表情だ。

でも綺麗な顔をしている。

「それ！」

怜が五円玉を賽銭箱に投げ入れ、鈴を鳴らして手を叩き、目をつむる。

細かい礼儀作法はよく分からないけれども、私も知ってる限りのことをやってみよう。怜も適当な感じだったし。

願いごとは、やっぱり受験のことかな。転校して、周りの高校のこともよく分からないけれど、入試本番までたくさん時間があるわけじゃないから。学問の神様に見守ってもらえるよう、お願いした。

私がお参りを済ませても、上条さんはまだ何もしていないようだった。

「聖香、お参りしないの？ 少し急いだほうが良いよ」

上条さんは怜を無視して、一步前へ出た。

お賽銭を丁寧に入れ、鈴を鳴らす。

二回深くお辞儀をして、胸の前で二回拍手。目をつむり、何かをお願いする。

数秒後、再び一礼して神前から下がった。

「……………」

上条さんのお参りの仕方に言葉を失う私と怜。正しいやり方なんて分からないけれども、何かを間違っているようには見えなかった。それぐらい、上条さんの参拝の仕方は完璧だった。

「……………どうかしましたか？」

「え、い、いやあ、聖香の参拝の仕方凄いなあって……………」

「う、うん。上条さん、よく知ってるんだね」

「……………このぐらいの作法、知っていて当然だと思いますが」

そして見下すような目を向ける上条さん。何も言い返せない。

上条さんの意外な一面を見ることができたお参りだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4976s/>

忘れられない約束

2011年7月2日03時16分発行